

「はあ、疲れた。」

金曜日の夜遅い時間に琉斗はよろよろと歩いていた。会社の飲み会の帰り道だった。毎週金曜日はコンビニでお酒を買うのがルーティンとなっていた。この日もコンビニに寄った。

「お、いいじゃんこれ。新商品なんだ。」

缶ビールとちよっとしたおつまみをかごに入れ、レジに向かった。

「ありがとうございます。」

少し愛想のない店員は袋に入れた商品を手渡した。

コンビニから外に出ると、ふと路地裏にいた白猫が目に入った。野良猫にしては妙に毛並みがよく、こちらをじっと見つめていた。

「猫？」

琉斗はゆっくりと近づいていった。大抵の猫はクルリと向きを変えてどこかに行くのだが、その猫は落ち着いた雰囲気ですその場に座り込んだ。

「にゃーん。」

琉斗はそう言った。すると、黒猫はにゃんと返事をした。

「お、喋った。じゃあね。風邪ひくなよ。」

琉斗は家に着いた。会社から歩いて十五分程度の距離にあるアパートは、一人暮らしの琉斗にとって十分だった。家賃もそこそこで新しくも古くもなかった。

「ただいま。」

小さく呟き扉を開けてから革靴を脱いだ。そうすると突然疲れて体が重くなり、レジ袋を机上に置き、ベッドに寝転がった

「明日何しよう。」

真っ白い天井を見てそう言った。

しばらくボーっとしていると、玄関から何か聞こえてきたのだった。玄関の扉を開けると、さっきの白猫がいた。

「ついて来たのか？」

「にゃん。」

猫は返事をしてスタスタと部屋の中に入ってきた。

「お腹でも空いたのか？ちよっと待ってて。」

琉斗は皿にミルクを入れ、猫の前に差し出した。そうすると、一生懸命飲み始めた。

「お腹空いていたんだな。」

琉斗は自分の夜ご飯を忘れ、猫の様子を見ていた。尻尾がフリフリと揺れ、可愛らしく思えた。

「ペットにでもしたいな。首輪してないようだし。」

小さく呟くと猫は返事をした。

「俺の言葉が分かるのか。まさかな。」

ミルクを飲み干すと、猫は琉斗の膝に乗りじゃんじゃんと何かを伝えようとしていた。
「ここに住みたいのか？」

「にゃーん。」

猫は部屋の奥に走って行った。猫はどうやら琉斗が気に入ったらしかった。

「しょうがないな。でも、大人しくしろよ。」

偶然出会った白猫を琉斗はペットとして飼うことにした。恋人もおらず友達も少なかったため、猫は心の拠り所となった。

次の日、猫のために首輪やペットフード、そして寝るためのクッションも買ってあげた。家に帰ると猫は絨毯の上で静かに待っていた。

「野良猫とは思えないほど大人しいな。」

まず首輪を付けてあげた。鬱陶しそうに首元を気にしていた。

「そうだ、名前決めようか。マルはどうだろう。」

「にゃん。」

猫は嬉しそうに言った。

「マルな。よし、昼ご飯食べようか。」

「にゃん。」

琉斗は皿にペットフードを乗せてから、袋ラーメンを作った。ラーメンを器に入れた時には、マルは既に食べ終わっていた。

「食べるの早いなマル。」

マルはラーメンを吸っている様子を膝の上でじっと見ていた。

「猫は食べたらずダメだぞ。」

食べたそうに見ているマルに注意した。

琉斗とマルはまるで兄弟のようだった。リードをつけることはなかったため外には出すことはなかったが、その分家の中で遊んだ。ダラダラしている普段の休日とは違い、充実した一日だった。

その夜、スーパーの割引商品を買ってきて夜ご飯を食べた。マルも隣で夜ご飯を食べ、琉斗はその様子を嬉しそうに眺めていた。

「可愛いなお前。もつと早くペット飼えばよかったな。それにして、まだ家に来て一日目のに自分ちのようにくつろげるよな。大したもんだよ。」

「にゃん。にゃん。」

琉斗は頭を撫でると、耳と尻尾がくねくねと動いた。

「さ、お風呂に入って、早く寝ようか。」

琉斗はお風呂に入った。さっと風呂から上がりタオルを首にかけてリビングに戻っていると、マルはテーブルの上で丸くなっていた。

「疲れたようだな。」

アイスを冷凍庫から出し口に咥えたまま、座布団の上に座った。マルはまだテーブルの上だ

った。

琉斗はニヤツと笑うと尻尾をちゃんと触った。するとマルはビクツとすぐに起き上がった。

「びっくりした。」

「あ、ごめんごめん。」

琉斗は謝った。だが、アイスを投げ捨てながら驚いた。

「猫が・・喋った。」

「え？僕の言葉が分かるの？」

マルは立ち上がり、くるっと一回転した。

「分かる・・なんだ。」

「分かんない。でも、面白いね。」

「化け猫。」

琉斗はマルから離れた。可愛かった黒い瞳はとても怖く思えた。

「何もしないよ。僕って他の猫とは違うのか。」

「違う。だって喋らないし。」

「今知ったんだよ。他の猫と同じだと思った。そういえば、人間の言葉分かってたんだよね。」

「じゃあ、俺の言葉も分かって返事してたってことか？」

「そう。」

マルはテーブルから降りて、クッションの上でくつろぎ始めた。琉斗はキッチンでフライパンを持った。

「で、出て行けよ。」

「なんで？飼ってくれるんじゃないの？」

「化け猫だろ。家で飼えないだろ。」

「喋る猫でしょ。問題ないんじゃないの。」

「気持ち悪い。」

「え、そ、そんなこと言わないでよ。僕、気持ち悪いの？」

するとマルは体が震え、目から涙が零れ落ちた。そして声をあげて泣き始めたのだった。

「ご、ごめん。そういうつもりじゃないけど。でも何されるか分かんないし。妖怪なのかお前？」

「分かんないよ。僕の親すぐに死んじゃったし。何も知らないんだから。えーん。」

マルはクッションに顔を沈ませ泣き続けた。

「そ、そうなのか。どうしよっかな。」

琉斗は頭を抱えた。突然の出来事でよく分からなくなった。

「わ、分かったよ。とりあえずここにいろよ。」

「いいの？」

「大丈夫だから。本当に何も危害は加えないのか？人を襲うとか。」

「そ、そんなことしないよ。僕は普通の猫だと思ってたもん。」

琉斗は頭を恐る恐る撫でた。毛並みや目や口など見た目は普通の猫と変わらなかった。ただ、人の言葉を喋るだけだった。

「分かったから。マルのこと信じるよ。」

「ほんと？信じていいの？」

「ああ、マルが僕を信用してくれれば、俺はマルを信用する。」

「うん、信じる。」

マルは嬉しそうに膝の上に乗った。ドキッとしたがいつも通りに撫でた。とても温かく、危険な生き物ではない感じがした。

「でも、どういう存在なんだろう。調べてみるか。」

琉斗はノートパソコンを開き、検索することにした。

「何それ。」

するとテーブルに乗り、マルは画面をのぞき込んだ。

「人間の文字は読めない。」

「そうなのか？これはいろんなことを調べられる機械なんだ。」

「便利だね。なんか分かった？」

「いや・・、言葉を喋る猫の存在は載ってないな。妖怪だったら猫又が出てくるけど。でも、猫又って尻尾が二つに分かれているみたいだな。」

「僕の尻尾って何本？」

「一本だな。じゃあ違うか。」

琉斗は様々なサイトを調べてみたが、どれもピンとくる情報は分からなかった。

「まあいいんじゃない？」

マルは大きなあくびをした。

「自分の事、知りたくないのか？」

「知りたいけど、今は寝たいな。たくさん遊んだから。」

「子供か。」

「まだ子供だもん僕。人の年で言うとなんとね・・」

マルは壁にかけてあった五月のカレンダーを見ながら答えた。

「これが二百四十くらい過ぎたくらいかな。」

「って二十歳ってこと？長生きじゃん。」

「そうなの？」

「その間自分を猫だっと思ってたって。訳ないだろ。」

「本当だって。色んな場所を巡っててたくさんの猫と出会ったんだけど、誰も教えてくれなかったし。」

「そうだったのか。ずっと一人きりで？」

「そうだよ。」

「なんで俺んちに來たんだ？」

琉斗は聞いた。マルは顔を上げて言った。

「君が一番優しそうだったから。」

「何それ。怖かったらどうするんだ？」

「そしたら噛んでた。」

「やっぱり人を襲うんじゃないか。」

「防衛のためだよ。あとね、人に飼ってもらえたら楽しく生きていけるでしょ。最近ベットの猫に聞いたんだ。」

「それが目的か。」

「まあね。」

マルは笑って言った。琉斗は疲れてしまいベットの上で寝転がった。だが、心のどこかでマルを警戒していた。

「不思議なこともあるもんだな。」

「だね。でも急に僕の話が分かる事なんてあるんだ。何かした？」

「なんもしてない。じゃあ、俺は早く寝るから。お休み。」

「僕も疲れた。」

琉斗とマルは目を閉じて眠った。窓から入ってくる風はとても気持ちよく、ぐっすり心地の良い夢の中に堕ちていった。

「おはよう。遊びに行こう。」

誰かの声で目が覚めると、目の前にマルの顔があった。

「おはよう。・・・って昨日のことって夢じゃなかったのか。」

「違うよ。もう朝だよ。」

体を起こしてからスマホの画面を見ると、八時だった。

「早起きだなお前。」

「マルだよ、僕の名前。」

「気に入ってるのか？」

「まあね。初めてつけてくれた名前だから。君の名前は？」

「琉斗。」

マルはベットから飛び降り、玄関に向かった。

「朝ごはん食べてないし。」

「外で食べよう。」

「わ、分かった。服着替えるから。」

琉斗はあくびをしながらベットから降りた。

日曜日の朝、空は雲一つない晴天で涼しい風が吹いていた。マルはその風を気持ちよさそうに浴びた。

「何食べたい？コンビニ行くけど。」

「パンなら食べれる。」

「分かった、ちょっと待ってろ。」

コンビニで琉斗はパンとサンドイッチを買ってから外に出ると、ドアの側でマルは女子高校生に撫でられていた。嬉しそうにゴロゴロと喉を鳴らした。

「マル、行くよ。」

マルは喋らずにトコトコと琉斗に近づいた。

「僕の事可愛いだって。」

「あんまり喋るなよ。バレるだろ。」

「分かってる。琉斗も僕の事可愛いって言ってたよね。」

「い、言ってるええし。」

「え？可愛いなの？」

マルは立ち止り、拗ねてしまった。

「か、可愛いよ。」

「でしょ、えへへ。」

マルは足取りが軽くなり、スキップで歩き始めた。

「めんどくさいな。」

ため息を吐いた。

街の中にある公園のベンチで朝ごはんを食べることにした。琉斗はパンをちぎって食べやすくすると、マルは黙々と食べた。

「食べすぎるなよ。」

琉斗もサンドイッチを頬張り、温かいお茶で流した。

「久しぶりに公園来たな。」

「そうなの？」

「最近仕事忙しいからな。それに公園に一人でくることはないだろ。」

「僕は来るよ。」

「猫だからな。」

琉斗はマルの頭をちゃんと突つくと、エツと目を丸くさせた。

「仕事って大変なの？」

「まあな。それでお金もらってるから。」

「お金は必要なの？」

「必要さ。それがなきゃ生きられないし。」

「ふーん、僕はお金なんていらないけどね。」

「猫だからな。」

もう一度突いた。

「突つくな。」

マルは指を甘噛みした。

「やったな、こいつ。」

「へーんだ。」

マルは遊具へ向かって走り出した。琉斗もゴミ袋を手にとって、そのあとを追いかけた。「待て。」

途中ゴミ箱にゴミ袋を捨て、全速力で走った。それでもマルは猫なためすばしっこく、距離を縮めることができなかった。

「お兄さんあの猫追いかけてるの？」

すると、公園内にいた小学生の男の子が話しかけて来た。

「うん。一緒に捕まえて。」

「楽しそう。捕まえる。」

「待てー。」

男の子たちは琉斗と一緒に追いかけた。

遊具の中やその周り、木や茂みの間を走り抜けるマルだったが、人の数には勝てなかった。次第にスピードが落ち、疲れたのかトイレの後ろで休んでいた時に男の子に見つかった。

「見つけた。」

マルは逃げられないと分かり、大人しく捕まった。

「あ、ありがとう。ハアハア。」

琉斗は息をきらしながらようやく追いついた。

「お兄さん、撫でていい？」

「いいよ。首輪をしっかりと掴んでおいてね。逃げないように。」

「うん。」

男のたちに尻尾や頭や肉球まで触られ、マルは不服そうな顔をした。琉斗はそれを見てニヤツと笑った。

「我慢しろよマル。」

マルは男の子を噛むことはなかった。

その時、後ろから琉斗を呼ぶ声が聞こえた。

「あれ、真田君？」

「え？あ、あれ、紗千さん？」

「こんなところで何してるの？」

「えっと、猫を追いかけてたんだ。」

スーツ姿の紗千は男の子たちが触っている黒猫を見た。

「さっき走っている真田君を見かけたから、子供たちと鬼ごっこしているのかと思っちゃった。」

「違うよ。こいつ、マルが逃げるから。」

「マルって言うんだ。ペット？」

「そうなんだ。最近飼い始めて。」

「触っていい？」

「いいよ。」

紗千は背中を優しく撫でた。そうすると尻尾がピンと立った。

「こいつ。」

「いい子ね。私ペット飼ってないけど、猫ちゃん好きなんだよね。」

「そうなんだ。こいつは大人しいよ。」

「可愛いね。いいな。引越したら飼おうかな。」

「楽しいよ。一人きりの家に友達が同棲している感じで。」

琉斗はそう言った。マルは顔を背けた。だが、尻尾は正直でフリフリと揺らした。

「あ、私と同じ一人暮らしだもんね。」

「あれ、紗千さんも一人暮らしだった？」

「そうだよ。彼氏とかいないし。」

紗千は顎下を撫でていると、ふと腕時計に目が入った。

「やばい。会社行かなきゃ。」

「日曜日なのに出勤？」

「そうなの。じゃあね真田君。」

そう言って走り出した。

「大変だな紗千さん。」

琉斗は立ち上がった。

「じゃあマル、帰るぞ。」

「じゃあねお兄さん、マル。」

マルの体を抱えると、マルは男の子たちに手を振った。

「すごい賢い猫。」

「いいな、猫飼おうかな。」

男の子たちは嬉しそうに手を振った。

「おいおい、猫らしくしろよ。」

「変なことされてないんだからこれくらいいいでしょ。ファンサービス。」

「どこでその言葉を覚えて来たんだが。もし化け猫飼ってるってバレたら捨てるからな。」

「ペットを飼ったら最後まで飼わない無責任だよ。だから野良猫が増えるんだよ。」

「ペットに言われるなんて屈辱的だな。」

「説得力あるでしょ。」

マルはそう言った。

家に帰るとマルはお風呂場に向かった。

「体洗って。」

「猫なのに濡れるのいいんだ。」

「僕は水浴び大好きだよ。」

「じゃあ俺もシャワー浴びるか。マルを追いかけて汗かいたし。」

マルと琉斗はシャワーを浴びることにした。マルは浴槽の中で頭の上から水を被った。気持ちよさそうだった。

「なんだか違和感あるな。」

「そのうち慣れるよ。」

「あんたが言うな。」

琉斗はマルのことが次第に好きになった。困らせるようなことはせず、何より素直だった。適当で深くは考えない自由気ままな性格であるが、琉斗とどうやら気が合うのだった。

体験版はここまでです。気になった方はご購入のほどよろしくお願いいたします。